禅房十事　茶盞

画：正親里紗

館　隆志

今回は「禅房十事」の中から、十番目の「茶盞」を紹介します。「ちゃさん」と読んでいます。茶を「ちゃ」と読むのは慣用音で、「さ」と読むのは唐音（宋音）です。茶の部分は宋音で「さ」と読んでも良いと思います。「茶盞」は茶を飲むための道具で、「建盞（けんさん）」とも言いますが、いわゆる天目（てんもく）茶碗のことです。天目台という台の上に載せて使用します。

中国では茶を飲む行為、すなわち喫茶は日常的なものでした。そして、平安時代にはすでに日本でも茶は飲まれていましたが、特別な行事などに限られていました。

この他、日本では博多を中心に、平安時代の後期から宋式の茶が飲まれていたようで、博多の遺跡からは、十二世紀前半の茶器が出土しています。しかし、本格的に茶が日本に導入されるのは鎌倉時代になってからです。

鎌倉時代に、栄西禅師が中国に留学し、禅宗の教えを受け嗣いで日本に伝えます。本誌四月号で、「禅では日常の心を重んじ、心こそほかならぬ仏であるからこそ、日常生活を重視した」というお話をしました。その結果

として、中国で禅寺の修行生活に、日常生活が流入することになりました。その一つが喫茶です。

中国の禅寺では毎日茶を飲むことになりました。それは日常の行為として、修行の一つとして毎日茶を飲んでいたのです。栄西禅師は、禅宗を日本に将来するとともに、中国南宋文化も一緒に輸入したのです。栄西禅師は『喫茶養生記』を記して茶の薬としての効能を紹介したことでも知られています。

意外に思うかもしれませんが、これまで鎌倉時代の禅僧たちの喫茶の状況はほとんどわかっていませんでした。そこで、疑問に思っていろいろ調べてみますと、鎌倉時代の禅寺では毎日の喫茶が定められており、また茶に関する記事も大変多いことがわかりました。その成果として花園大学国際禅学研究所のウェブサイトに論文を掲載しておりますので、興味のある方は御覧になってください。

さて、このように禅寺での毎日の喫茶を示す一例が「禅房十事」の「茶盞」の記述なのです。

「禅房十事」の「茶盞」で、鎌倉時代中期の大休正念禅師は、お茶を飲むのは「ご飯を食べ終わって毎日のこと（飯罷尋常慣用底）」と述べています。また、鏡堂覚円禅師は「これ（茶盞）のことは皆がご存じ（者箇誰人不識渠）」と冒頭で述べています。鎌倉時代の中期から後期にかけて、すでに禅寺では毎日の喫茶が常識でした。それこそ、この時代の正しい禅の生活だったのです。

鎌倉時代の禅僧たちも、茶を説法に多用しました。住持は、「喫茶去」と言っては、茶を飲みに行かせました。また、「且坐喫茶」と言っては、迎え入れて茶をふるまいました。そうして、相手の器量を試したのです。

あるいは、茶に関連する公案を提示しました。「家常」「尋常」の「茶飯」という表現で、毎日の茶と飯のことを説法しました。茶は、禅僧の説法の常套句でもありました。中世、茶を説法に頻繁に用いたのは、禅僧だけです。禅宗では、茶は日常でありつつも特別な存在だったのです。

日本で茶を日常的に飲むことは、鎌倉時代

の禅寺から始まりました。それが、後世の茶道のみならず、現在私達が日常的に茶を飲むという行為へと繋がっていったのです。禅宗の展開は、現在の私達の日常生活にも大きく影響しているのです。

中国の「禅房十事」には「茶盞」が含まれておりません。中国では禅寺だけでお茶を飲んでいたわけではありません。どこでも誰でも、みなお茶を飲んでいました。喫茶そのものがあたりまえになりすぎていたため、あえて「禅房十事」として示す必要がなかったのではないでしょうか。

しかし、日本ではそういうわけにはいきません。鎌倉時代に中国から日本に僧侶がやってきて、あるいは日本の僧侶たちが中国に留学して禅を伝えました。ようやく、南宋文化が日本の禅寺に入り始めた頃、まだ日本では茶は一般的に日常では飲まれていなかったのです。

いずれにしても、中国からやってきた禅僧は、禅寺に茶を飲むという文化を積極的に入れようとしたと思われます。禅の教えを広めるのに、茶をより積極的に布教に用いたのでしょう。禅と茶の関係を考える上では、「禅房十事」の「茶盞」は極めて興味深くあります。

禅寺の中の十の道具、「茶盞」はすなわち天目茶碗のことです。中には曜変天目茶碗のように、大切に伝えられた「茶盞」もありますが、これらは禅の正しい生活を伝えたものなのです。

鎌倉時代から勤め続けられた禅の正しい生活は、毎日規則正しい生活をし、毎日きちんとお茶を飲むことです。どうぞ、皆さんも禅の正しい生活を実践してみてください。あるいは、知らず知らずのうちに、禅の正しい生活を実践しているのかもしれませんね。

舘 隆志（たち りゅうし）
一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭渓道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。